

# 木構造に的を絞る!

構造家・佐藤孝浩

朝倉幸子◎TH-1

illustration:Taco

## ■棟梁の輪廻

構造家の佐藤孝浩さんは、北海道で昭和50年に生まれました。棟梁だった母方の祖父の生まれ変わりという周りに刷り込まれて?! しまったために、小学生にして将来は大工と決めていた。母親に「建築は仕事が形に残るからいい」と真顔で答える早熟な子だったとか。有言実行で工学院大学大学院まで進む。最初から構造エンジニアを目指したのかと編集長が尋ねると、「設計の授業で講評を聞いてもいまいちよさが理解できなかった。自分には構造系が向いている」と考えたそうです。大学院時代に当時、東京大学の博士課程に在籍されていた腰原幹雄さん、(現東京大学教授)とともに研究する機会を得て、充実した修士論文を仕上げた。

## ■SDG時代

学生の時に構造設計集団〈SDG〉のアルバイトをしていたのは、就職を見据えてのことだった。当時のSDGは横浜大さん橋の客船ターミナルの設計や、横文彦さん設計のテレビ朝日新社屋、韓国のワールドカップ競技場などを手掛けていた賑やかな時代だった。佐藤さんは「来年も働かせてもらいたい」と直接渡辺さんに言い、願いは聞き入れられる。SDGでは、現在リズムデザインを営む中田琢史さんが直属の上司だった。新潟朱鷺メッセの現場が始まり、渡辺所長に「現場に常駐したい」と直接交渉。勿論、入社半年に満たない新人には「駄目」との返事。それでも中田さんの下でならと、現場に出してもらうことができた。見かけより強靱な精神力で、人生を自分で切開いてきた佐藤孝浩さんです。

中田さんも横総合計画事務所の鹿島大陸さん(現副所長)に教育を受けたと話してくれたが、佐藤さんには「君はここに何をしにきたんだ?!」と厳しい言葉。「当時は設計の最終ブラッシュアップは現

場でやっていた時代で、入社半年くらいの何も解らない自分には当然の評価だった」。そんな約2年間の現場常駐は、今では最高の経験となったと話す。

渡辺邦夫さんから直接の指導を受けることは少なかったが、現場での打合せや、数少ない渡辺さんからの指導や何気ない会話の中で、渡辺さんの考えや建築に対する姿勢など学ぶことは多かった。また、SDGでの経験は佐藤さんに多くの機会や人とのつながりをもたらしてくれた。SDGを辞め地元北海道に戻っていた時に呼び戻してくれたのが腰原さん。研究室の私設アシスタントとして、構造設計の手伝いをして5年間を過ごしたのです。

## ■木造にかける想い

現在、佐藤さんは、桜設計集団構造設計室を開業している。大学で木構造の研究をしていたこともあり、当初から木構造にかかることが多い。NPO法人Team Timberize理事としても活動しており、日本における中高層木造の先駆けといえる「下馬の集合住宅」、「高知県自治会館新庁舎」などを手掛けてきた。最近では、伝統工法による五重塔や三重塔なども手掛けている。CLTを用いた物件も多く手掛けており、特に高知県での仕事が多い。若手の設計事務所にも門戸を開く高知県の気質がおもしろいという。講師を務める高知県林業大学校では、学生とオリジナルの耐力壁などの楽しい実験をする。

木材は自然材料なので1+1が2にならないことがある。解析だけでなく経験による判断が必要なところが面白く、木造をやる理由にもなっている。最近では文化財の耐震補強などにも興味があるがジレンマも多い。そんな時はダイビングでストレスを発散する。「海は人工物がないからいい」と構造漬けの日々を言外に滲ます構造家なのです。

